

夢見たものは—ヒアシンスハウスアートコロニイ展 2021年10月30日～11月7日 別所沼公園ヒアシンスハウス前庭

別所沼の畔にたたずむヒアシンスハウス。夭折した詩人・建築家、立原道造の夢見たこのちいさな週末別荘が全国から寄付を集め竣工されて17年になります。すっかり周りの風景にも融け込んで、芸術を愛する人のささやかなメルクマールとなってきました。実際現在でもこの小屋を目指して、遠方からの来訪者が絶えないそうです。

SMFともゆかりの深いこの地で、コンテンポラリーダンスや風車のインスタレーション、各種の美術展示やワークショップ、旅する小さな家プロジェクト、世界詩人会議など、多くの催しが行われ、芸術にかかわる人々に出会いと交流の機会を提供し、日常と芸術を攪拌する稀有な場として機能してきました。「サイタマアートコロニイプロジェクト」の一環として開催される今回の「ヒアシンスハウスアートコロニイ展」もこの流れに連なり、新たな扉を

開く試みの一つといえます。
10月30日にヒアシンスハウス前庭にオープンしたヒアシンスハウスアートコロニイ展。この展覧会にエントリーしたのは、彫刻家で埼玉大学准教授の石上城行さん、写真家・美術家の浅見俊哉さん、舞踊家の藤井彩加さん、酒井銀丈さん。いずれも気鋭のアーティストとして活躍中の方々です。さらに最終日の11月7日には、金工家でエデュケーターの矢花俊樹さん、加藤こども造形教室主宰の加藤典子さんによる親子で楽しめるワークショップが開催されました。

石上城行さんの作品《記憶の容(かたち) 一生きていた舟1.0》は、橙、黄、緑、青、白に塗られた短冊状の木で構成されたカラフルで巨大なお魚、トラックから下ろすのも6～7人でやっとという大きさです。目ざとく見つけた子どもたちが駆

け寄ってきたり、はいポーズで記念撮影したりと、大人気でした。お魚のかたちは「生きた化石」と言われるシーラカンに似ています。カラフルな短冊のひとつひとつがちいさなお魚のようにも見えますが、そうするとスイミーのお話の世界ですね。石上さんは「今から2000年くらい前の縄文時代、この辺りは海の底だったんだよね。こんなお魚が泳いでいるって想像してごらん、想像するとほんとに見えてきたりするよ。あのヒアシンスハウスも、ここにこんな別荘があったらいいな、と想像した人がいたから実現したんだよね」と子どもたちに語りかけていました。

浅見俊哉さんの作品《青写真の瓦版 現在の青図・社会の皮膚 COVID19》は、時代劇や寺社で使われる山形の立札(制作協力:利根川兼一さん)を7つ会場となる前庭に立て、そこに浅見さんが得意とするサイアノタイプ(日光写真)の技法で制

作した新聞を掲示したものです。新聞の紙面では、コロナの感染拡大や医療逼迫、度重なる緊急事態宣言、国際芸術祭の延期、五輪の無観客開催など、1年半余にわたるコロナ禍の推移が報じられており、青く染まる紙面にマスクや手袋、はさみなど日々の生活用品や木の葉のシルエットが白く浮かんでいます。「新聞を「社会の皮膚」に見立て、そこに日々の時間を焼き付けることで「社会の情報」と「個人の記憶」の関係を探り表現する」という浅見さんのライフワークの「COVID19版」とも言えます。本展のプロジェクトディレクターでもある浅見さんは、連日、会場に詰めて、毎朝、作品を取り換え、計63点を展示しました。作品を介して、また9日間という時間を共有することで、お子さんやお年寄りまで、別所沼公園を訪れるさまざまな年齢層の方々とお話ししてきたことも、大きな収穫だったそうです。

最終日の午後に行われた藤井彩加さん、酒井銀丈さんのダンスパフォーマンス《万博》も見応えのある内容でした。ヒアシンスハウスの戸口から静かに登場した二人、アリア風の抒情的な音楽が流れる中、素朴でややコミカルな動きから始まります。青春賛歌でしょうか。身を寄せ合っても、リフトでも、離れても、息の合ったコンビネーションです。音楽が途絶えると、マリ

オネット風の動きを間に挟んで、新生への展開が図られます。音楽も転調し、不協和音も含んだアップテンポのメロディーに変わります。駆り立てられるように、ダンスもしだいに激しさを増し、走り回り、転がり、地を這い、飛び上がります。何かに抗うように、呼応して拳を突き出し突き上げる二人。フィナーレでは肩車の二人が小高い塔のようにヒアシンスハウスの入り口に聳えます。それはトータムにも十字架にも見えます。そんな圧巻の20分、前庭を囲んだ40人ほどの観客からも大きな拍手がわき起こりました。

7日の午前の矢花俊樹さんのワークショップ「別所沼の古代魚を作ろう!」は、展示中の石上さんの《記憶の容(かたち) 一生きていた舟1.0》をみんなで鑑賞し、自分だけのお魚を思い描いてスケッチし鋳型をつくり、トロリと融けた錫を流し込んで自分だけのお魚を鋳物で作ってしまおう、というスグレもの。矢花さんが案出した「キッチン鋳造」という手法がベースになっています。鋳型を作り融けた金属を流すなんて、めったにできない体験。おまけに自分だけの素敵なお魚の置物がおみやげになり、みんな大満足です。作者のトークを含めた鑑賞から鋳造完成まで、なんと45分の驚きのスピーディーさ、スゴ腕シェフ矢花さんならではの

です。(2回実施、保護者含め計14名参加)
午後の加藤典子さんのワークショップ「言葉と写真で綴るわたしの発見」には親子と大人を含めて17人が参加、作品鑑賞とオリエンテーションの後、参加者が思い思いに公園をめぐって自分なりの発見を写真に撮り、言葉にしてみます。その後、写真を印刷、それを持ってみんなで発見の現場を巡り、順次発表してもらい、さまざまな見方や感性を共有して一緒に楽しみました。加藤さんのご主人もスマホで送られてきた写真をその場で印刷と大活躍でした。参加者の発見をまとめた冊子『言葉と写真集』は後日送られてくるそうです。

好天に恵まれた9日間、ヒアシンスハウスを背景に、見応えのある作品やダンス、楽しいワークショップが展開され、多くの方々がアートを楽しみ、ゆったりと会話できる時空が流れて行きました。それは立原道造の夢見た芸術家コロニイが結実したひと時でもありました。夢の第一章がヒアシンスハウスの実現、第二章がSMFの仲間たちや活動だとすれば、そろそろ夢の第三章が始まるのかも知れません。



石上城行さんの作品《記憶の容(かたち) 一生きていた舟1.0》



浅見俊哉さんの作品《青写真の瓦版 現在の青図・社会の皮膚 COVID19》



執筆：中村誠 編集：SMF広報委員会 発行：Saitama Muse Forum
〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤9-30-1 埼玉県立近代美術館内
問い合わせ：SMF.info@artplatform.jp



藤井彩加さん、酒井銀丈さんのダンスパフォーマンス《万博》



矢花俊樹さんのワークショップ「別所沼の古代魚を作ろう!」



加藤典子さんのワークショップ「言葉と写真で綴るわたしの発見」

